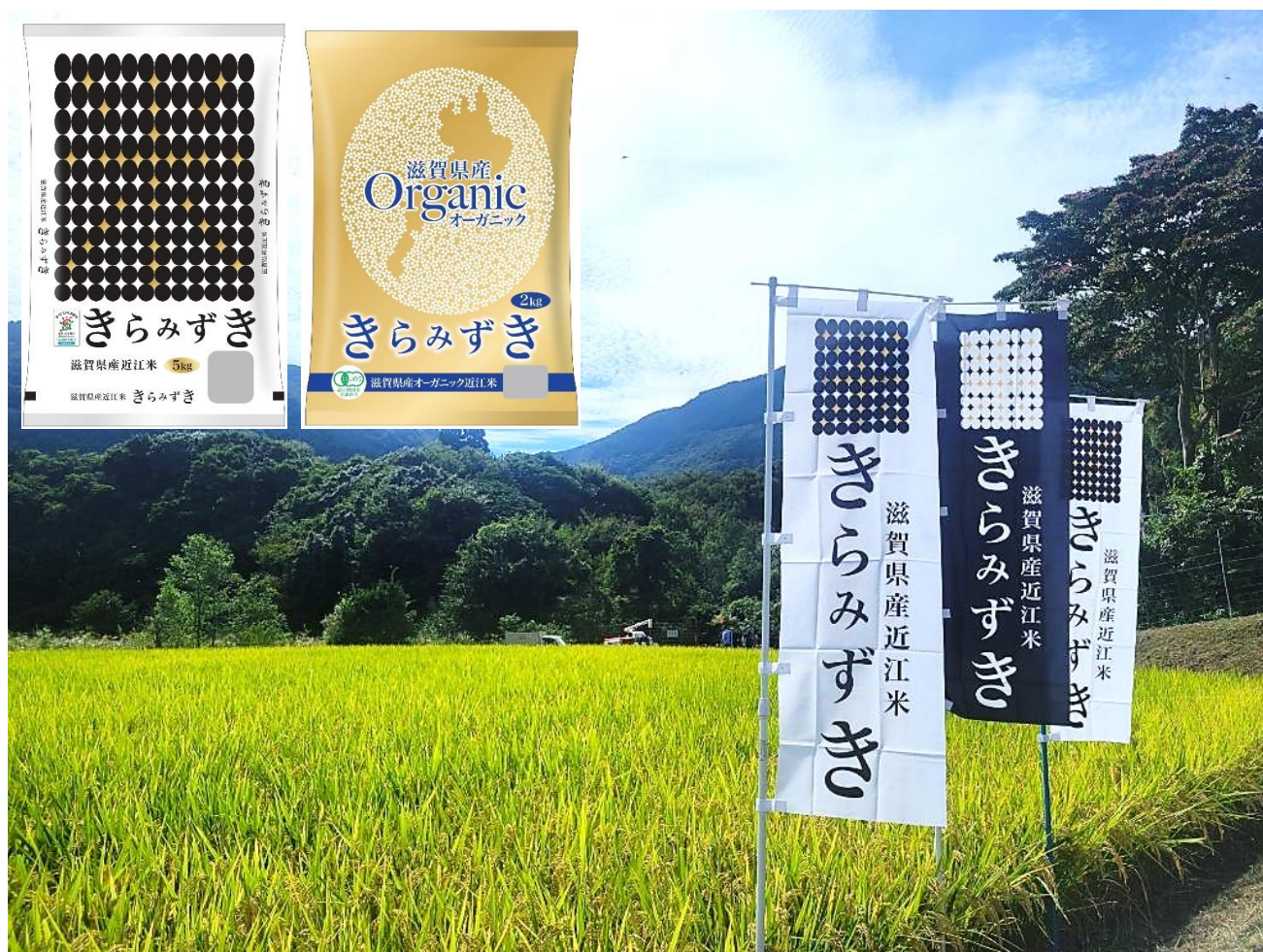


令和7年産「きらみずき」栽培研修会



令和7年(2025 年) 2月
近江米振興協会

1 背景とコンセプトについて

- 農政の憲法ともいわれる「食料・農業・農村基本法」が四半世紀ぶりに改正され、今回の改正においては、生産・加工・流通・小売・消費の各段階の関係者が連携する「食料システム」という新たな概念が規定され、合理的な価格の形成や環境負荷低減など、持続可能性を高める取組を進めるため、関係者が一体となって取り組んでいくことを強く打ち出された。
- 本県では、「環境こだわり農業」に約 20 年前から取り組み、令和5年3月に策定された「滋賀県環境こだわり農業推進基本計画」においては、琵琶湖の保全はもとより地球温暖化の防止や生物多様性の保全など地球環境問題への対応や、オーガニック農業を環境こだわり農業の柱の一つに位置づけること、環境こだわり農業の強みを生かした流通・販売の強化が盛り込まれた。また、令和4年7月には国連食糧農業機関(FAO)より、「森・里・湖(うみ)に育(はぐく)まれる漁業と農業が織りなす琵琶湖システム」が世界農業遺産に認定されたところ。
- このような中、県農業技術振興センターにおいて、中生熟期で食味や玄米外観品質に優れ、気候変動下において安定した生産が可能な新品種「きらみずき」が育成された。
- この機をとらえ、「きらみずき」を琵琶湖の保全に止まらず、温暖化防止や生物多様性の保全など、持続可能な農業のシンボルとして位置づけ、本県の環境こだわり農業をより深化。

【推進コンセプト】 こだわる人が選ぶ「おいしさ」と「やさしさ」

【生産】高度な技術を持って、オーガニックをはじめ、化学合成農薬や化学肥料を可能な限り削減した栽培に限定



【消費】“おいしさ”とともに、温暖化防止・生物多様性の保全など一歩進んだ取組の価値に共感し「きらみずき」を支持、購入

- 「きらみずき」は生産から販売までの繋がりを強く意識し、コンセプトである“こだわる人が選ぶ「おいしさ」と「やさしさ」”による好循環が生まれるよう、生産・流通・販売の一体的な取組を進める必要がある。現在、「きらみずき」で実践する近江米の一歩進んだ取組の価値を多くの消費者に共感いただくため、県内はもとより、首都圏や京阪神での販路開拓に向けて、関係機関・団体が連携して取り組んでいる。
- 今後、消費者や実需者等から「コシヒカリ」を超える高い評価を得られるよう、「きらみずき」を生産者や関係団体、指導機関等が一体となって育てていく。

2 ブランド化に向けた生産および流通・販売方針について

(1)生産方針について

栽培方法:①または②で栽培し、「滋賀県環境こだわり農産物」の認証を受けたもの。

①「化学肥料(窒素成分)や殺虫・殺菌剤(化学合成農薬)を使用しない栽培」

＜肥料＞本田において化学肥料不使用栽培

ア)有機質肥料の利用、大豆・野菜跡等の活用、たい肥・緑肥等の活用 等

＜農薬＞殺虫・殺菌剤(化学合成農薬)不使用栽培

ア)除草剤は使用可能

イ)過去に病害虫が多発した地域(ほ場)を避け、予防的防除(箱施用剤等)を削減

ウ)畦畔草刈り+色彩選別機の活用で、カメムシ防除の削減

②「オーガニック栽培」(有機JAS認証を受けたもの)

より環境に配慮した生産へ

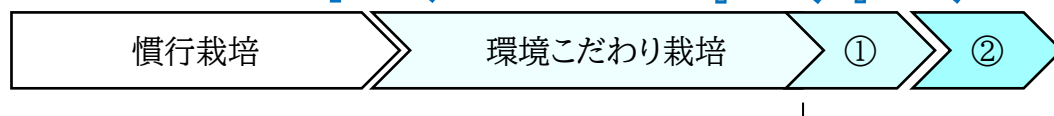


図 近江米における「きらみずき」の位置づけについて(イメージ)

生産者の主な要件と誓約事項

消費者や実需者等から「コシヒカリ」を超える高い評価を得られるよう、生産者は以下の要件を満たす生産を行うこと。なお、詳細については、『令和7年産「きらみずき」推進ガイドライン』を参照。

○ 病害虫防除に関して、病害虫の常発地域(ほ場)を避けることでリスク回避を図り、かつ、地域の共同防除体制等との棲み分けや合意形成が可能であること。

○ 品種名のほ場看板を設置し、生産のPRを行うこと。

○ 全量種子更新し、自家採種は行わないこと。

※令和2年12月の種苗法の一部改正により、法律上、自家採種は禁止されています。

○ 近江米振興協会等が主催する研修会や情報交換等に参加すること。

○ 本田において化学肥料(窒素成分)や殺虫・殺菌剤を使用した場合は、その旨をJA等の集荷業者へ報告するとともに、「きらみずき」として消費者等へは販売しないこと。

(2) 栽培計画・記録の提出について

- 事前に栽培計画を作成いただき、病虫害・雑草防除法や施肥管理を把握するとともに、栽培期間を通じた生育状況や、収量、出荷先の評価等についても情報収集しますので、播種作業が始まるまでに栽培計画を作成するとともに、10月には栽培記録を作成の上、栽培申込書を提出した集荷業者あて郵便、FAX等でご提出願います。

栽培計画の提出期限：令和7年 3月7日(金)

栽培記録の提出期限：令和7年 10月3日(金)

または別途集荷業者にて定める日

※当栽培計画・記録については、環境こだわり農産物認証制度における生産計画・生産記録とは異なりますのでご注意ください。

様式はこちら ➡

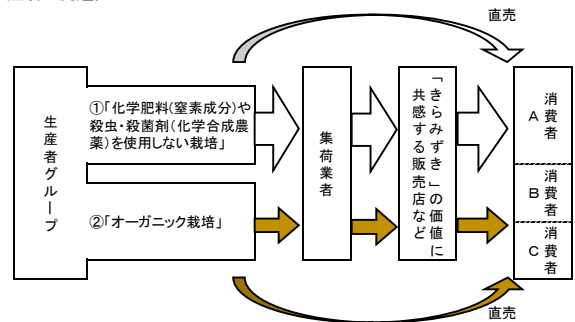
[令和7年産「きらみずき」の栽培者向け情報について](#)

検索

(3) 流通・販売方針について

- 当面はJAまたは集荷団体を通じて一定のロットを確保し、「きらみずき」の価値に共感いただける販売店、生協や学校給食などへ特色ある米として流通させる。
- 令和6年度、近江米振興協会では、首都圏におけるオーガニック米に特化した市場調査を実施しており、「ここ滋賀」では首都圏でのハイエンド層への販路開拓を進めている。また、「きらみずき」を本県におけるオーガニック農業拡大のための一つの柱と位置付け、収量・品質の高位安定化、生産から流通・販売の各段階で生産者や関係者が一体となった取組によるブランド化を図る取組を支援しており、令和7年産には、オーガニック「きらみずき」のより一層の拡大を目指す。
- 令和6年7月下旬からInstagramおよびX(旧Twitter)にて「きらみずき」の情報発信を開始(詳細については以下の二次元コードから)。

■生産者と流通先のイメージ



Instagram

@kiramizuki_okome



X

@kiramizuki_kome

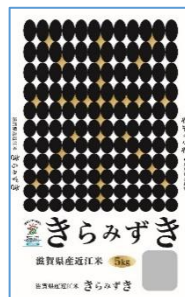
- 生産者独自の販売ルートを活用することも可能とするが、市場でのPRを図るため、その販売には共通のPR資材(デザイン等)を積極的に使用することとする。「きらみずき」のロゴタイプ・シンボルマーク・米袋デザインは以下のとおり。

きらみずき
滋賀県産近江米

ロゴタイプ



シンボルマーク



米袋(表面)



米袋(裏面)

- 要領や申請書等は、県 HP にて公開しており、申請に関して不明な点がある場合は、滋賀県農政水産部みらいの農業振興課食のブランド推進室(077-528-3892)まで。

環境こだわり米 ロゴデザイン

検索



[環境こだわり米ロゴデザイン等使用申請について-滋賀県](#) のページへ

郵送による申請方法

添付の「申請書」に加え、下記2点の画像の提出をお願いします。

- ・ロゴデザイン等の使用内容が分かる企画書
- ・使用対象物の写真(精米袋等)

メールによる申請方法

上記県 HP から申請書をダウンロードいただき、申請書を作成の上、下記データとともにメールにて提出をお願いします。

- ・ロゴデザイン等の使用内容が分かる企画書
- ・使用対象物の写真(精米袋等)

【送付先】

gc01@pref.shiga.lg.jp

滋賀県農政水産部みらいの農業振興課
食のブランド推進室

(4) 令和6年度「きらみずき」のプロモーションおよび販路開拓について

① 「きらみずき」試食会について

- 令和6年10月から一部JAに協力いただき直売所で試食会を開催している他、11月からは平和堂店頭でも試食会を開催した。また、今年度から京阪神地域でも「きらみずき」が販売されていることから、2月24日にはアルプラザ城陽店(京都府)において試食会を兼ねた大型イベントを実施。



11月4日にアル・プラザ瀬田店で実施した試食会



11月2～3日に彦根市の平和堂本部で開催された「SHIGA KOMECON2024」でのPR

② オーガニック近江米の販路開拓について(近江米振興協会事業)

- 今年度、首都圏と京阪神に分け、オーガニック近江米を取り扱っていただける小売店(百貨店、生協、米屋、オーガニック専門店など)の調査業務を実施している。
- 具体的には、オーガニック近江米の取り扱い意向がある小売店を首都圏で10者、京阪神で7者選定し、県内米卸しや農業者との取引に向けた出荷条件などを調査。
- 事前の聞き取り調査により、首都圏・京阪神の両地域での取引先候補(百貨店、高級スーパー、オーガニック宅配等)を選定し、現在各店舗への営業訪問(サンプル提供、仕入条件等の聞き取り)により、オーガニック近江米取り扱いの本格的な調査を実施しているところ。

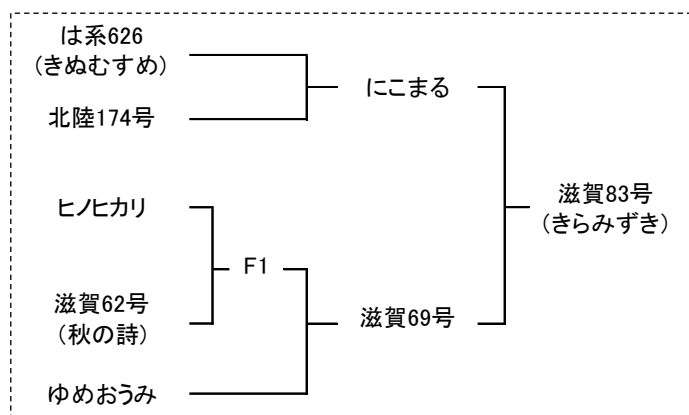
③ 首都圏販路開拓支援事業(ここ滋賀事業)

- 例年、首都圏情報発信拠点“ここ滋賀”で県産品の販路開拓事業を実施している。今年度は、県産品のメインを農産物としており、農産物の中でも「きらみずき」の販路開拓を中心としている。
- 「② オーガニック近江米販路開拓について」との住み分けは、ここ滋賀事業がミシュランガイド3つ星施設やフォーブス・トラベルガイド5つ星レストランなどの客単価が数万円の飲食店を中心としていること、②が百貨店などの小売店を対象にしている点。
- 今後、委託先と連携している米卸しにより、各レストラン等に「きらみずき」の取り扱いの意向調査を行う予定。

3 品種特性

(1) 育成の系譜について

- 「きらみずき」は「にこまる」を母、「滋賀 69 号」を父として 2009 年に人工交配をして得た後代から育成。



(2) 特性全般について(表を参照)

- 成熟期は「日本晴」より2日遅く、「秋の詩」より3日早い、中生の晩熟期。稈長は「日本晴」より9cm、「秋の詩」より20cm 短く、耐倒伏性に優れる。
- 収量性は「日本晴」、「秋の詩」より優れる。玄米の千粒重は「日本晴」より大きく、「秋の詩」と同等。玄米の形状は「日本晴」、「秋の詩」よりやや細長く、玄米表面の縦溝がやや目立つものの、色沢は飴色で光沢は優れる。高温登熟であっても白未熟粒は生じにくいことから、玄米外観品質は優れる。
- 「きらみずき」は移植後の初期生育が比較的旺盛で分げつを確保しやすい一方で、初期生育が旺盛過ぎると穂肥時期である幼穂形成期に至るまでに栄養不足となり葉色が極端に低下する場合がある。
- 葉いもちほ場抵抗性は「秋の詩」より優れ、「日本晴」と同等の“中”、穂いもちほ場抵抗性は「秋の詩」より優れるものの、「日本晴」よりやや劣る“やや弱”。なお、いもち病真性抵抗性遺伝子型は Pia および Pii であると推定される。そのため、いもち病に対する抵抗性は十分ではなく、常発地では栽培を避けることが重要。
- 食味について官能試験による総合評価では「日本晴」、「秋の詩」よりも優れ、「コシヒカリ」と同等以上。食味に関連するタンパク質やアミロースの含量は「日本晴」より低く、「秋の詩」と同等。味度は「秋の詩」、「日本晴」よりも優れる。
- 短強稈なのでほとんど倒伏しないが、穂肥が多過ぎる場合には、未熟粒の増加や食味の低下が懸念される。一方、登熟期間に栄養が不足すると減収や背白粒の増加によって品質低下する場合もあることから、穂肥施用は収量と玄米外観品質、食味のバランスを考慮することが必要。

表1 特性概要

	きらみずき	標)日本晴	比)秋の詩
熟期	中生の晩	中生の晩	中生の晩
出穂期(月.日)	8.09	8.08	8.13
成熟期(月.日)	9.16	9.14	9.19
稈長(cm)	74	83	94
穂長(cm)	20.6	20.6	20.5
穂数(本/m ²)	381	382	367
倒伏程度(0-5)	0.0	0.3	1.2
精玄米重(kg/a) ²⁾	60.4	56.7	57.6
同上比率(%)	107	100	103
玄米千粒重(g)	22.9	22.5	22.7
玄米外観品質(1-9) ³⁾	4.1	5.1	4.7
食味官能試験 総合評価 ⁴⁾	0.16	-0.52	-0.20
玄米タンパク質含量(%) ⁵⁾	6.2	6.6	6.3
アミロース含量(%) ⁶⁾	17.7	18.7	17.3
味度 ⁷⁾	80.1	71.3	76.9
耐倒伏性	強	やや強	やや弱
穂発芽性	やや難	中	やや難
葉いもちほ場抵抗性	中	中	弱
穂いもちほ場抵抗性	やや弱	中	弱
縞葉枯病抵抗性	罹病性	罹病性	罹病性
高温登熟性	やや強	中	中

1) 2016年～2023年 奨励品種決定調査標肥区(5月10日頃植、基肥0.45kgN/a、穂肥0.25kgN/a)平均。ただし、アミロース含量は2018年～2021年、味度は2017年～2022年の平均値。

2) 玄米調製網目幅は1.85mm。

3) 目視評価、値が小さいほど良い。4.5以下が農産物検査1等に相当。

4) 基準品(農業技術振興センター産コシヒカリ)との7段階相対評価(-3～+3)。パネル約20名。

5) 静岡精機(株)米麦分析計BR-5000で測定。水分15.0%換算。

6) ビーエルテック(株)オートアナライザーⅢ型により搗精歩合約90%の白米を粉碎し測定。

7) 東洋ライス(株)トーヨー味度メーターMA-30Aおよびマルチ味度メーターMA90システムによる測定値。

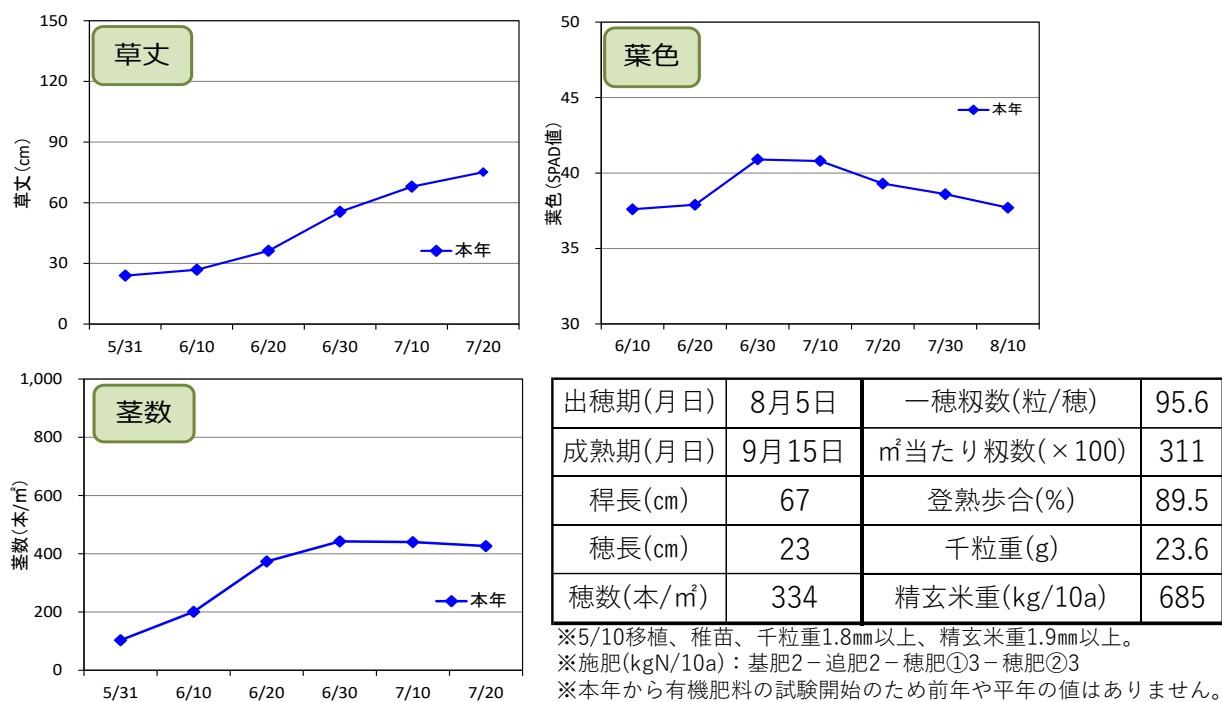
8) 化学肥料による試験データ。「化学肥料や殺虫・殺菌剤(化学合成農薬)を使用しない栽培」の場合、約10%程度は精玄米重が少なくなると想定している。

4 令和6年産の概況と次年度にむけた栽培の注意点について

(1) 令和6年産水稻の生育概況について（別紙参照）

(2) 令和6年産「きらみずき」の概況について

- 生産者毎の単収の平均値は 435kg/10a（230～600kg/10a）と、生産者やほ場によるバラつきが大きく、全体的に低収傾向である（11月1日時点とりまとめ、生産者126名分）。
- 玄米外観品質は、同熟期の「日本晴」、「秋の詩」と比べて白未熟粒の発生が少なく、農産物検査の1等比率は86.5%と高い（令和6年10月31日現在 農水省公表値）。



令和6年(2024年)水稻作況調査 調査結果(きらみずき)

「きらみずき」の実証ほにおける収量・品質等の状況について

	移植日 (月/日)	幼穂形成期 (月/日)	出穂期 (月/日)	精玄米重 (kg/10a)	整粒 (%)	食味値	タンパク (%)
大津市	5/30	7/28	8/19	464	80	79	6.4
野洲市	5/1	7/17	8/1	549	67	77	6.6
甲賀市	5/10	7/20	8/6	595	78	79	6.5
竜王町	5/18	7/20	8/15	416	63	65	7.8
甲良町	5/13	7/15	8/9	614	71	81	6.0
愛荘町	5/18	7/19	8/12	446	72	77	6.4
長浜市	5/17	7/23	8/15	568	78	77	6.5
高島市	5/22	7/25	8/13	507	73	80	6.1

※精玄米重は坪刈調査による値。

（２）単収が少なかったほ場の減収要因

- 生育中の栄養状態が悪化（葉色が低下）し、その後の追肥で十分に回復できず、有効茎歩合の低下や登熟不良となった。
- 穂いもち発生の懸念などの理由から、穂肥を減肥または無施用とした結果、出穂後の登熟期間の栄養状態が悪く、登熟不良となった。
- 雑草が多く発生し、競合によって生育抑制や登熟不良となった。
- 縞葉枯病、ごま葉枯病等の病害が発生し、収量減少を助長した。

（３）次作に向けた栽培の注意点

- ほ場選定
 - ・ 地力の低いほ場では、稲体の栄養状態（葉色）の維持ができず、減収リスクが高いことからできるだけ避ける。
 - ・ 穂いもち、縞葉枯病、ごま葉枯病等の病害やカメムシ等の被害が例年多いほ場も避ける。
- 栄養状態維持の対策
 - ・ 単収が確保できているほ場は牛ふん堆肥を連用し、土づくりを実践されている事例が多いことから、堆肥施用や深耕等の土づくりを継続して進める。
 - ・ 地力の低いほ場や初期生育が旺盛となったほ場では、生育途中で葉色が低下しやすいことから、葉色が淡くなる前に追肥を施用する。
 - ・ 近年の猛暑下では登熟後期まで稲体の活力が維持できず収量・品質の低下を招くリスクが高いため、穂肥は減肥せず規定量を施用することが望ましく、葉色が濃い場合でも、施用時期を遅らせる等して減量せずに施用する。
- 雑草対策
 - ・ あぜ塗り等の漏水対策を行い、均平に留意して代かきを精度良く仕上げる。
 - ・ 除草剤を使用する栽培体系では散布後７日間は止水を守り、落水やかけ流しは行わない。
 - ・ オーガニック栽培では機械除草と耕種的抑草技術（複数回代かき、米ぬか散布、深水管理等）を組み合わせた防除体系で抑草効果を高める。
- 病害対策
 - ・ 縞葉枯病については、刈り株再生芽（ひこばえ）やイネ科雑草が病原ウイルスを保毒したヒメトビウンカの越冬場所になり、次作の病原ウイルスの伝染源になるため、前作の水稻収穫後に早期に耕うんし、畦畔等ほ場周辺の雑草を刈り取る。
 - ・ ごま葉枯病については、生育後期に栄養凋落が起けると発生が助長される。イネの初期生育が旺盛になりすぎず、登熟後期まで肥料が不足しないよう栽培管理や施肥管理を改善するとともに、堆肥や土づくり肥料の施用、深耕等の土づくりを実践する。

令和6年産水稻の生育概況と 次年度の技術対策

農業技術振興センター
農業革新支援部

1. 令和6年産水稻について

1) 生育状況

- 植え傷みは少なかったものの、5月中旬～6月上旬が低温で推移したため生育は一時抑制傾向となり、移植の遅いほ場を中心に分けつが抑制されました。
- 梅雨入り(6/17)後は、平年と比べて降雨が多く日照時間が少なく、気温は平年並～高い状態が続き、7月以降は最高気温が35℃を超える日もありました。草丈は平年並～やや高く、茎数は平年並～やや少ない傾向で推移しました。
- 梅雨明け(7/18)以降は高温多照傾向で推移し、9月の気温はかなり高くなりました。そのため幼穂形成期は平年並～やや早く、出穂期、成熟期はやや早くなりました。
- 平年と比べていもち病の発生はやや少なかったですが、縞葉枯病はやや多く、ごま葉枯病が多くみられました。また、斑点米カメムシ類の発生量が多く、注意報が発表されました(7/17)。

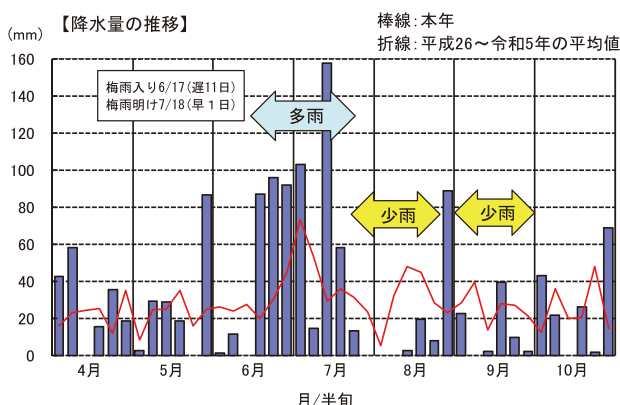
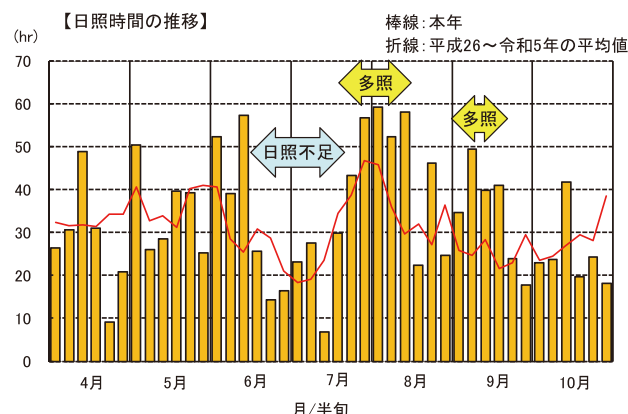
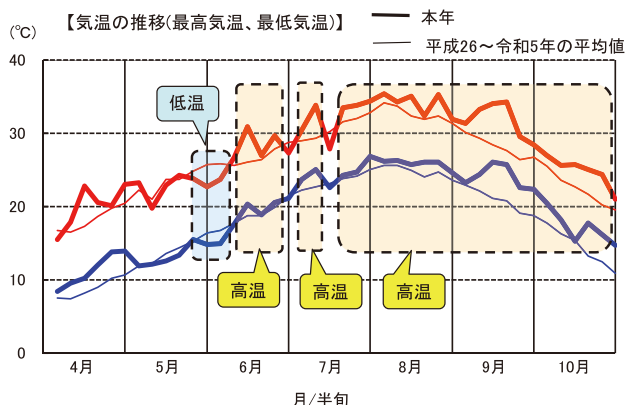
2) 収量と品質の結果

- 滋賀県の作況指数は、100の「平年並」(10月25日現在)ですが、生産者やほ場によるばらつきが大きく、聞き取りによる単収は、早生品種では平年並～やや少、中生品種ではやや少です。
- 玄米外観品質は、例年に比べて白未熟粒やカメムシによる斑点米、胴割粒が多く発生し、滋賀県内の水稻うるち玄米の1等比率(10/31現在)は59.6%(直近10年平均64.9%)と低い状況となっています。

3) 収量減、品質低下の要因(推測)

- 穂数が平年より少なく、籾数が十分に確保できなかったほ場で収量が減少しました。

令和6年(2024年) 水稻作期間半月別気象図(彦根気象台観測)

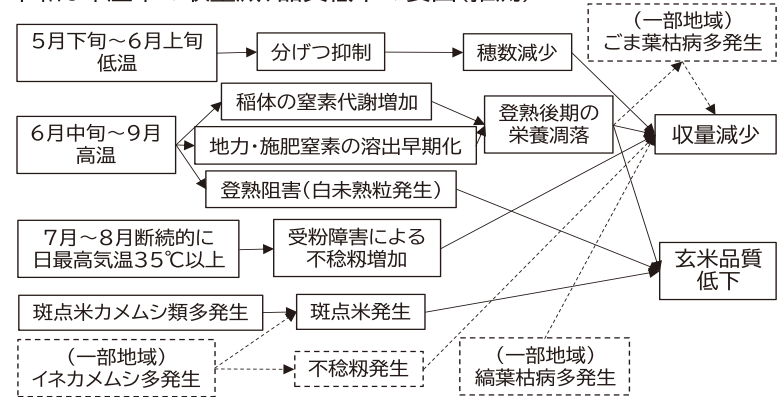


○6月中旬～9月の高温の影響によって稲体の窒素代謝が増加したことや、地力窒素などの溶出が早まったことで登熟後期に栄養凋落したために登熟不良となり、白未熟粒が多く発生し玄米品質が低下するとともに収量が減少しました。

○7月から8月にかけて、受粉障害の発生が多くなるとされる35℃を超える日が続いたことで、ほ場によっては不稔籾が増加し、収量減少の要因となったと考えられます。

○斑点米カメムシ類の発生量が多く、吸汁害による斑点米が発生し、玄米品質が低下しました。
 ○一部地域では、イネカメムシの発生量が多く、出穂期の吸汁害による不稔籾が発生し、収量減少の要因となったと考えられます。
 ○一部地域では、縞葉枯病やごま葉枯病が多発したほ場が見られ、収量減少を助長したと考えられます。

令和6年産米の収量減、品質低下の要因(推測)



2. 次年度の技術対策について

1) 土づくり

○田畑輪換の繰り返しや気温の上昇により有機物の分解が進み、水田の地力は低下傾向です。
 ○地力が高いほ場では高温条件下でも栄養状態が保たれ、減収、品質低下は生じにくいことから、牛ふん堆肥などの有機物の積極的な施用による地力向上対策が有効です。

2) 高温登熟性に優れる品種の活用

○高温条件下での白未熟粒の発生程度には品種間で差があることがわかっています。
 ○滋賀県の奨励品種では、早生熟期の「みずかがみ」、中生熟期の「きらみずき」が高温登熟性に優れており、その活用が有効です。

3) 生育に応じた施肥

○高温が続くと稲の栄養が不足し、登熟が阻害されて白未熟粒の発生につながります。
 ○稲の栄養維持のため、全量基肥施肥の場合でも、幼穂形成期の茎数が多く、幼穂形成期以降の葉色が淡いほ場では、幼穂形成期の14日後(出穂期の11日前)頃に追肥を1～2kg N/10a程度施用しましょう。

4) 適正な水管理

○出穂期前後は、水稻の一生の中で最も多くの水を必要とする時期であり、水が不足すると白未熟粒の発生や籾の充実不足が助長されます。
 ○出穂前後各3週間は常時湛水管理とし、その後は間断かんがいを行い、落水は収穫作業に支障のない範囲で、できる限り遅らせましょう。

5) 病害虫の発生に留意し、適期防除

○斑点米カメムシ類については、水稻の出穂3週間前と出穂期の2回の草刈りを徹底しましょう。イネカメムシによる不稔が多発するほ場は、通常防除に加え、出穂期に防除します。
 ○縞葉枯病については、次作の病原ウイルスの伝染源となるヒメトビウンカの越冬場所を減らすため、水稻収穫後は早期に耕耘し、ほ場周辺の雑草を刈り取りましょう。例年発生が多い地域や、感染好適期間が長くなる中生・晩生は、育苗箱施薬し、6月下旬に発病株率が1%以上ある場合は薬剤散布します。
 ○ごま葉枯病については、生育後期に栄養凋落が起こると発生が助長されるため、イネの初期生育が旺盛になりすぎず、登熟後期まで肥料が不足しないよう栽培管理や施肥管理を改善するとともに、堆肥や土づくり肥料の施用、深耕等の土づくりを実践しましょう。

「きらみずき」栽培計画・記録

栽培者名等		栽培方法※1 (注釈を参考に、① または②を記入)		魚のゆりか ご水田※2	
連絡先		ほ場地番		面積(a)	

※1 栽培方法には、①「化学肥料（窒素成分）や殺虫・殺菌剤（化学合成農薬）不使用栽培」
または②「オーガニック栽培」（有機JAS認証を受けたもの）の番号を記入。
※2 魚のゆりかご水田に取り組まれる場合、「〇」を記載ください。

1 主な作業等

作業名	予定時期（計画）	実施月日（記録）	項 目	見込（計画）
播種		/	単収(kg/10a)	
定植		/	出荷量(kg)	
収穫		/	出荷先	

※購入苗で播種日がわからない場合は記入不要。

2 病害虫・雑草防除の使用農薬(フェロモン剤、生物農薬等カウントしない農薬も含めて記入する。)

農薬名（剤型等、商品名を正確に記入すること）	計 画		記 録		
	化学合成 農薬の 成分数	使用予定 時期	化学合成 農薬の 成分数	使用月日 (記録)	使用量または 希釈倍数
				/	
				/	
				/	
				/	
				/	
化学合成農薬の成分数計					

3 土づくり・施肥の使用資材

本田に施用する資材等の名称（たい肥・緑肥等の有機物や窒素成分を含まない資材等、農薬以外に使用する資材を全て記入する。）	資材の 窒素成分 (%)	化学肥料窒 素成分の割 合(%)	計 画			記 録		
			使用予定 時期	使用量 (kg/10a)	化学肥料窒 素成分量 (kg/10a)	使用 月日	使用量 (kg/10a)	化学肥料窒素成 分量(kg/10a)
						/		
						/		
						/		
						/		
						/		
※育苗培土に含まれる窒素成分は記入不要			化学肥料窒素成分量計 (計画)			化学肥料窒素成分量計 (記録)		

4 チェック事項(該当する項目に✓する)

- ☐ いもち病に強い品種ではないため、本病の常発地での作付けは避ける。
- ☐ 畦畔雑草の防除には除草剤を使用しない。
- ☐ 色彩選別機を活用し、着色粒を除去する。
- ☐ その他化学合成農薬を削減する取組（）

※ 5以降の項目については、収穫後の記録提出時にご記入願います

5 生育状況

幼穂形成期	月 日頃		出穂期	月 日頃	
生育の状況等	(田植え～穂肥施用まで)				
	(穂肥施用～収穫)				
病害虫・雑草の発生状況等					

6 乾燥・調製等

収穫量 (kg)		単収 (kg/10a)	
ふるい網目 (mm)		検査等級 (等)	

7 出荷先

※ J A等集荷業者への出荷については、評価の記入は不要です。

出荷先名	出荷量(kg)	販売価格や出荷先・購入者等の評価
①		
②		
③		

8 栽培全般や食味等に関する感想等

--

- ☒ いもち病に強い品種ではないため、本病の常発地での作付けは避ける。
- ☐ 畦畔雑草の防除には除草剤を使用しない。
- ☒ 色彩選別機を活用し、着色粒を除去する。
- ☐ その他化学合成農薬を削減する取組（

※ 5以降の項目については、収穫後の記録提出時にご記入願います

5 生育状況

幼穂形成期	7月15日	出穂期	8月10日
生育の状況等	(田植え～穂肥施用まで) ・中干までの茎数確保は順調であった。 ・幼穂形成期までに葉色がやや落ちたが、追肥を施用する程ではなかった。 (穂肥施用～収穫) ・穂肥施用前に葉色がやや落ちたが、穂肥施用後は回復し、収穫時期まで極端な葉色低下はなかった。		
病害虫・雑草の発生状況等	・いもち病の発生は見られなかった。 ・一部でヒエが発生したが、抜き取った。 ・畦畔雑草の管理を徹底したことから、カメムシの発生はほとんど見られなかった。		

6 乾燥・調製等

収穫量(kg)	3,353	単収(kg/10a)	528
ふるい網目(mm)	1.9	検査等級(等)	全量1等

7 出荷先

※ J A等集荷業者への出荷については、評価の記入は不要です。

出荷先名	出荷量(kg)	販売価格や出荷先・購入者等の評価
① J A●●	3,000kg	—
② ●●レストラン	210kg	・栽培方法や良食味であることを説明し、自身のコシヒカリと同等価格で取引した。 ・レストランで新品種の表示を行い、お客の評価を聞く予定。
③ ●●直売所	90kg	・栽培方法や良食味であることを店頭表示し、自身のコシヒカリより高い価格で販売した。

8 栽培全般や食味等に関する感想等

・有機質100%の肥料を初めて使用したが、特段生育に問題はなかった。しかし、施用量が多いため労力がかかった。
 ・草丈が短いことから、倒伏はなかった。
 ・食味は、自身が栽培するコシヒカリに比べて●●であると感じた。
 ・次年度も栽培してみたい。

令和7年度栽培者用 Ver1
令和7年1月 滋賀県農業技術振興センター

- ・化学肥料(窒素成分)を使用しない
- ・下表の基準量を目安に施用
- ・地力の低いほ場での栽培は減収リスクが高いので避ける
- ・側条施肥の場合、6月下旬頃に葉色が淡くなり始めたら葉色 3.8 以下になるまでに（ ）内の量を目安に追肥
- ・穂肥は幼穂形成期（幼穂長 1mm）の1週間前(7月上中旬)および、1回目の2週間後を目安に2回施用

- ・ 温湯消毒は 60～62℃で 10 分間
- ・ 温湯消毒後の種子は直ちに浸種するか、十分に風乾して低温低湿度で保管する
- ・ 5 月 10 日から 20 日を中心に移植
- ・ 栽植密度は下表の基準を参考とする

- ・代かき前にあぜ塗りや畦畔補修で漏水対策
- ・除草剤処理後はやや深水で 7 日間の止水管理を遵守
- ・目標穂数の 8 割の莖数（莖数の推移を参考）で溝切り・中干しを実施
- ・出穂前後各 3 週間は常時湛水管理
- ・品質低下防止のため刈取予定日の 5 日前までは間断かんがいを実施

- ・殺虫・殺菌剤(化学合成農薬)を使用しない
(ただし、有機 JAS 規格で使用が認められている
農薬は使用可能)
- ・過去にいち病やウンカ類などの病害虫が多発生
した地域・ほ場での栽培は避ける
- ・いち病の発生源となる余剰苗は速やかに除去する
- ・斑点米カメムシ類の対策は、畦畔の2回連続草刈りと
色彩選別機を利用して行う
- ・イネ縞葉枯病などのまん延を防ぐため、収穫後早期に
耕うんを実施する

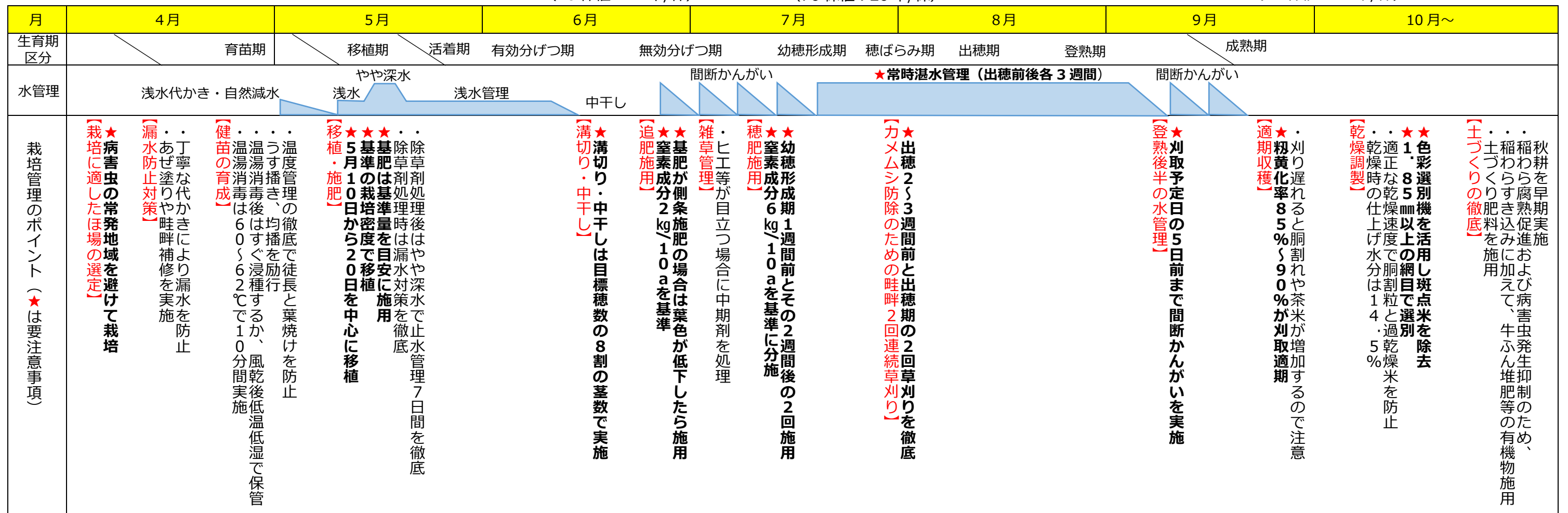
- ・ 粉黄化率 85～90%が刈取適期
- ・ 乾燥時の仕上げ水分は 14.5%
- ・ 1.85 mm以上の網目で選別



H28～R5 年の平均値
(5/10 移植・
農技センター内)
* 緩効性肥料による
データ。

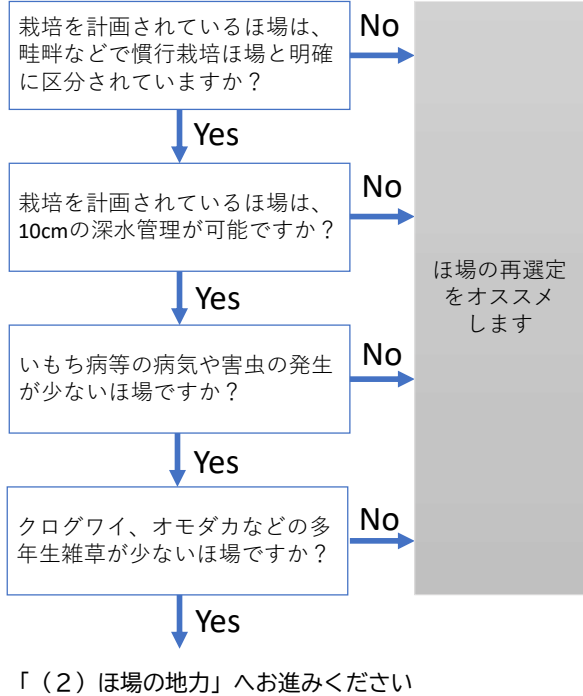
○収量（/10a）（粒厚 1.85 mm以上）・品質の目標

※10a 当たり窒素成分量
※肥料は「有機アグレット」を想定



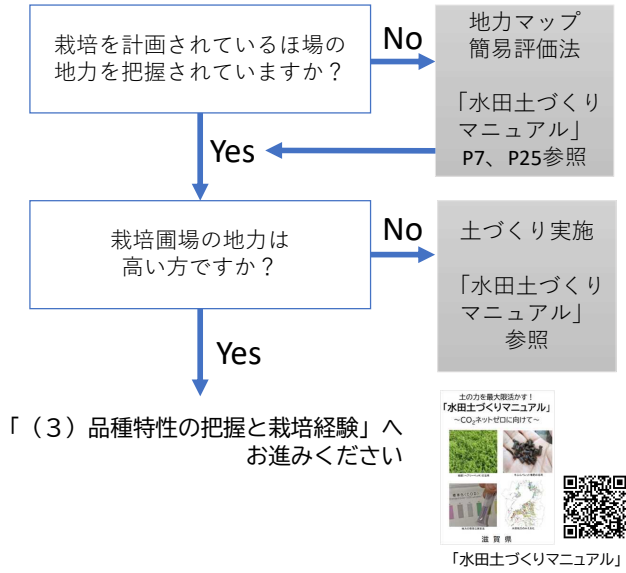
1 オーガニック栽培の事前チェック

(1) ほ場の選定



注) 乗用型の水田除草機による除草を行う場合は、長方形で面積が広く、比較的耕盤が浅い圃場が適しています

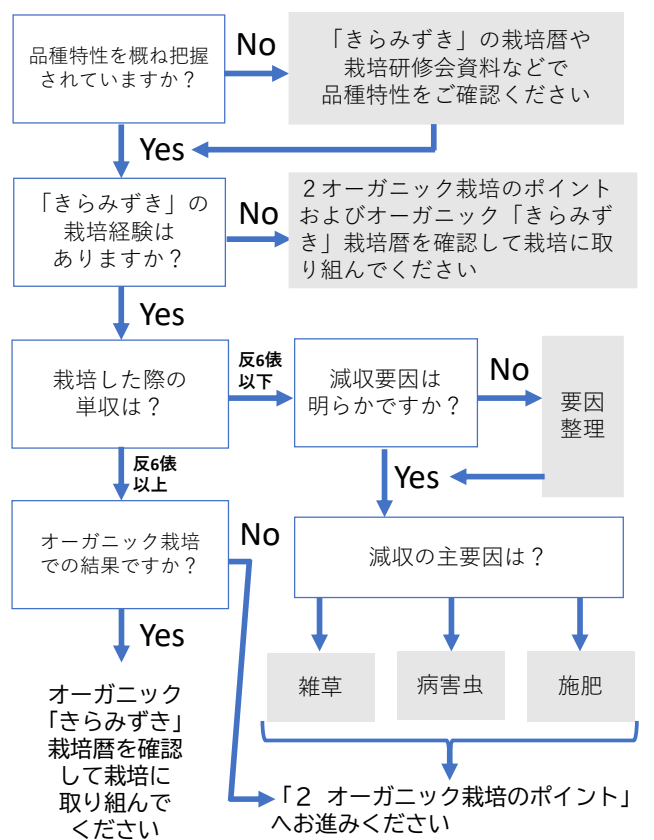
(2) ほ場の地力



「きらみずき」ポイントQ

「きらみずき」は中生品種であり、「コシヒカリ」と比べると生育期間が長くなります。このため、肥料切れを起こさないように注意が必要です。地力の不足分を補うのが施肥の基本です。地力が高ければ、施肥量を抑えることができ、かつ、肥料切れのリスクも回避しやすくなります。

(3) 品種特性の把握と栽培経験



2 オーガニック栽培のポイント

(1) 雑草対策

①育苗

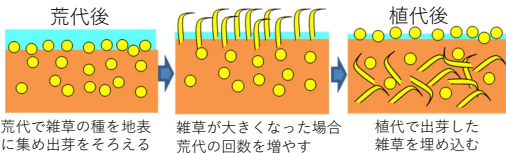
○深水管理や雑草との競合に打ち勝つため、**中苗～成苗**で充実の良い健苗を移植

- 育苗日数：30～40日
- 播種量：80～100g/箱
- 播種後14日後、21日後頃に追肥を行う（窒素成分1g/箱）



②複数回代かき、米ぬか散布

○荒代と植代の間隔を**2週間空け**、**発芽した雑草を埋め込む**



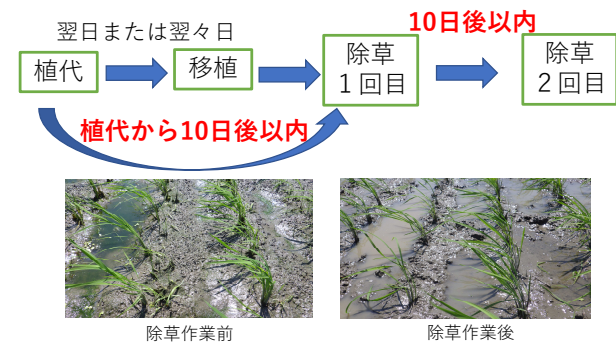
○**移植直後に米ぬかを60～100kg/10a散布**
→発芽に酸素を必要とする雑草の出芽を抑制

「きらみずき」ポイントQ

「きらみずき」は初期の分けつが確保しやすい品種です。分けつを確保して稲が水面を覆うことにより、雑草の生育を抑えることができます。

③水田除草機による機械除草

○作業の時期が遅れないように注意！



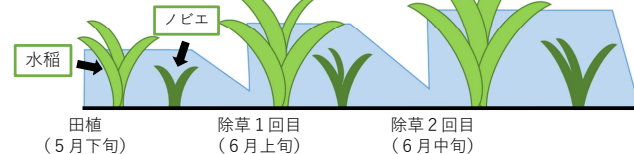
④深水管理

○移植直後は**5cm**、その後生育に合わせ**10～15cm**

- 雑草（ノビエ）の葉先が**水面から出ない深さ**で管理
- コナギやホタルイには効果が低いので注意



深水管理のイメージ



(2) 病害対策

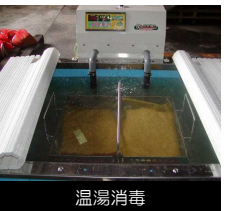
①ほ場選定

- 病原菌は残渣や土壌中で越冬するので、**常発ほ場を避ける**
- いもち病は水滴から侵入するので、朝露が乾きにくい**日当たりや風通しの悪いほ場を避ける**



②温湯消毒

- 発芽率を保ちながら殺菌効果を高めるため**60～62℃で10分間**処理する
- ※たっぷりのお湯を使い、粃を入れた時の温度低下を極力防ぐこと！



③いもち病対策

- 置き苗**はいもち病の発生源となるので、速やかに**除去**する
- 有機JASで使用可能な農薬（カスガイシン剤等）を散布する



※カスガイシンは耐性菌の発生リスクがあるため連用しない！

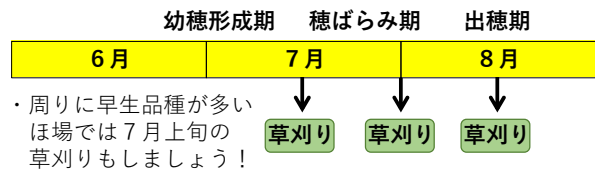
「きらみずき」ポイントQ

「きらみずき」の葉いもちの抵抗性は“中”、穂いもちの抵抗性は“やや弱”です。周辺の草刈りを行う等、風通しの良い、いもち病の発生しにくい環境を整えましょう。

(3) 害虫対策

①斑点米対策

○**畦畔の草刈り**



・周りに早生品種が多いほ場では7月上旬の草刈りもしましょう！



・**色彩選別機**を活用して**斑点米を除去**しましょう！



※草刈りが有効でないカメムシもいます。



②次年度の病虫害対策

・秋耕で害虫が越冬する“**ひこばえ**”(刈株再生芽)を**速やかにすき込み**ましょう！



(4) 土壌施肥管理対策

近年の猛暑下では登熟後期まで葉色を維持するのが難しく、**地力の維持**や**追肥・穂肥の施用**が重要です。

①有機物や家畜ふん堆肥で地力を維持！

○作物残さ

- 稲わら、麦わら等の残さは焼かずすき込むことで、地力維持効果が期待できます。



○牛ふん堆肥

- 収穫残さに加えて、牛ふん堆肥を連用することで、地力の向上を図れます。

- 一般的に、堆肥の地力増進効果の大きさは**牛ふん>豚ふん>鶏ふん**となります。

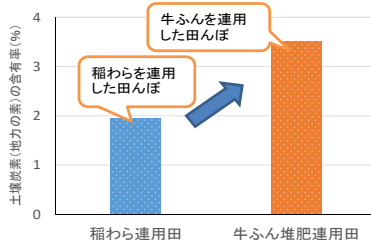


図 牛ふん堆肥連用による地力向上効果
注1) 隣接ほ場にて1973年から連用開始。1998年測定。
注2) 有機物は秋に施用。牛ふん堆肥は2t/10a施用。

※より詳しい内容は下記を参照してください
「オーガニック近江米の手引き」P4～P5
「水田土づくりマニュアル」

②追肥と穂肥で葉色を維持！

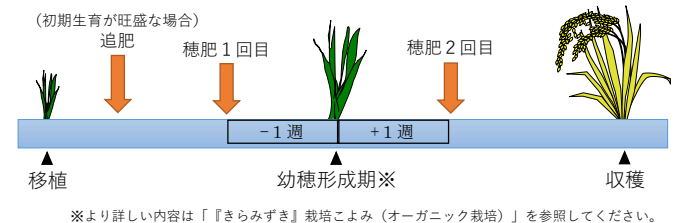
有機質肥料は化成肥料と異なり、**肥効がゆっくり**と現れます。

○追肥

初期生育が旺盛になると幼穂形成期までに葉色が極端に落ちる可能性があり、**葉色が落ちる前に追肥**を行います。

○穂肥

肥効が緩やかなため**幼穂形成期の1週間前**と、**1回目施肥の2週間後**の2回に分けて施用します。



「きらみずき」ポイントQ

近年の猛暑下では葉色の維持が難しく、**穂肥はなるべく減肥せず施用**するのが望ましいです。ただし、周辺ほ場のいもち病発生状況には注意が必要です。

【「オーガニック近江米」の手引き】
とあわせてご利用ください

令和7年(2025年)版

令和7年1月 滋賀県農業技術振興センター

<施肥>

- ・下表の基準量を目安に施用
(別途移植直後の米ぬか散布を前提としている)
- ・米ぬかを散布しない場合、または6月下旬頃に
葉色が淡くなり始めたら葉色 3.8 以下になるまでに
() 内の量を目安に追肥
- ・穂肥は幼穂形成期(幼穂長 1mm)の1週間前(7月中旬)
および、1回目の2週間後を目安に2回施用

施肥法	地帯区分	基肥	追肥	穂肥Ⅰ	穂肥Ⅱ	合計
全層	湖辺粘質、 高地力田	3 kg	(1 kg)	3 kg	3 kg	9(10)kg
	湖辺砂質、 平坦、中山間	4 kg	(1 kg)	3 kg	3 kg	10(11)kg
側条	湖辺粘質、 高地力田	2 kg	(1～2 kg)	3 kg	3 kg	8(9～10)kg
	湖辺砂質、 平坦、中山間	3 kg	(1～2 kg)	3 kg	3 kg	9(10～11)kg
大豆跡		0～2kg	(1～2 kg)	3 kg	3 kg	6～10kg

※10a 当たり窒素成分量

※肥料は「有機アグレット」を想定

施用する肥料により肥効が異なるので、追肥で生育を調整する

<育苗・移植>

- ・ 温湯消毒は 60～62℃で 10 分間
- ・ 温湯消毒後の種子は直ちに浸種するか、十分に風乾して低温低湿度で保管する
- ・ 播種量は乾粃 80～100g/箱
- ・ 30～40 日育苗とし、充実の良い中苗～成苗を育成
- ・ 播種後 14 日目と 21 日目ごろに追肥を行う
(窒素成分 1g/箱)
- ・ 5 月 20 日から 30 日を中心に移植
- ・ 栽植密度は下表の基準を参考とする

湖辺、平坦	中山間
60株/坪	60～70株/坪

<水管理>

- ・代かき前にあぜ塗りや畦畔補修で漏水対策
- ・深水管理の実施
(移植直後 5 cm、生育に合わせ 10~15cm)
- ・茎数 300 本/m²を目安に溝切り・中干しを実施
- ・出穂前後各 3 週間は常時湛水管理
- ・品質低下防止のため刈取予定日の 5 日前までは
間断かんがいを実施

<雑草対策>

- ・代かき（荒代と植代）の間隔を2週間空け、発芽した雑草を土中に埋め込む
- ・雑草が多いほ場では荒代を2回、植代を1回実施し、それぞれの間隔を2週間空ける
- ・植代の翌日もしくは翌々日に移植
- ・移植当日もしくは翌日に米ぬかを60～100 kg/10a 散布
- ・水田除草機による機械除草を実施
1回目：植代後10日以内 2回目：1回目から10日以内
雑草の多いほ場では3回目を実施（2回目から10日以内）

<病害中対策>

- | | |
|--|------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> ・有機農産物 J A S 規格で使用可能な農薬以外は使用しない ・過去にいちも病やウンカ類などの病害虫が多発生した地域・ほ場での栽培は避ける ・いちも病の発生源となる余粒苗は速やかに除去する ・斑点米カメムシ類の対策は、畦畔の 2 回連続草刈りと色彩選別機を利用して行う ・イネ縞葉枯病などのまん延を防ぐため、収穫後早期に耕耘を実施する | <p>穂数</p> <p>R4～R6
(5 月下旬)</p> |
|--|------------------------------------|

＜收穫、乾燥・調製＞

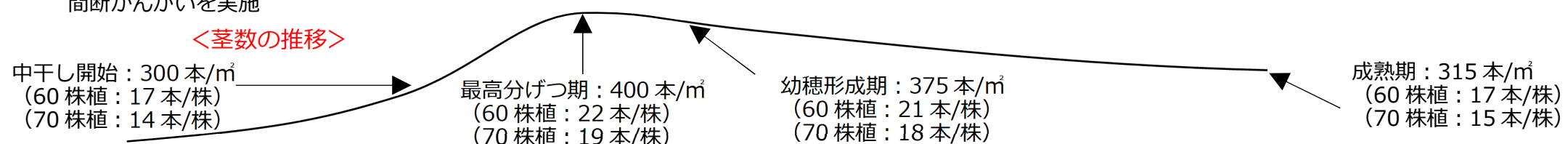
- ・ 粉黄化率 85～90%が刈取適期
- ・ 乾燥時の仕上げ水分は 14.5%
- ・ 1.85 mm以上の網目で選別

○特性概要

項目	きらみずき
幼穂形成期	7月24日
出穂期	8月14日
成熟期	9月21日
稈長	74cm
穂数 (/m ²)	315本

R4~R6 年の平均値

(5月下旬・中苗移植、農技センター内)



月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月～				
生育期 区分		育苗期	移植期	活着期	有効分げつ期	無効分げつ期	幼穂形成期	穂ばらみ期	出穂期	登熟期	成熟期
水管理	浅水代かき・自然減水	やや深水	深水管理	中干し	間断かんがい	★常時湛水管理（出穂前後各3週間）			間断かんがい		
栽培管理のポイント（★は注意事項）	★病害虫の常発地域を避けて栽培 【栽培に適したほ場の選定】 ★漏水防止対策 ・丁寧な代かきにより漏水を防止 ・あぜ塗りや畦畔補修を実施	★30℃～40℃育苗とし、充実の良い中苗を育成 ・温度管理の徹底で徒長と葉焼けを防止 ・うす播き、均播を励行 ・乾糲80～100g/箱 ・温湯消毒後はすぐ浸種するか、風乾後低温低湿で保管 ・温湯消毒は60～62℃で10分間実施 【健苗の育成】	★複数は基準量を目安に施用 ★代かき・施肥 ★基準の栽培密度で移植 ★5月20日から30日を中心に移植 ★移植	★雑草管理 ・残草状況に応じ、2回目から10日以内に3回目実施 ★1回目機械除草（1回目から10日以内） ★2回目機械除草（植代後10日以内） ★深水管理（移植直後5cm、生育に合わせて10～15cm） ★移植直後に米ぬかを60kg／1000kg／10a散布	★溝切り・中干しは茎数300本／mを目安に実施 ・中干し終了後は通常の水管理	★穂肥施用 ・窒素成分1～2kg／10aの追肥を行う ・穂肥2回目以降の葉色が淡ければ、出穂4日前までに ★幼穂形成期1週間前と、1回目の2週間後の2回施用 ★窒素成分6kg／10aを基準に分施	★畦畔草刈り（出穂2～3週間前） ★畦畔草刈り（出穂期） 【カメムシ防除のための畦畔2回連続草刈り】	★刈取予定日の5日前まで間断かんがいを実施 【登熟後半の水管理】	★刈り遅れると胴割れや茶米が増加するので注意 ★初黄化率85％～90％が刈取適期 【適期収穫】 ・適正な乾燥速度で胴割れと過乾燥米を防止 ・乾燥時の仕上げ水分は14・5％ 【乾燥調製】	・病害虫発生抑制のため、収穫後早期に秋耕を実施 ・稲わら腐熟促進、多年生雑草の抑草および ・稲わらすき込みに加えて、牛ふん堆肥等の有機物施用 【土づくりの徹底】	